

松尾

世阿弥作

季	地	ワキ	後	シテ	ツレ	ワキ	前
は	は	シテ		老翁	男	官人	
秋	山城	松尾明神	前に同じ				

「四方の山風静かにて。／＼。梢の秋ぞ久しき。

詞

「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても西山松の尾の明神は。靈神にて御座候へども。朝に隙なき身なれば。いまだ参詣申さず候ふ間。此度君に御暇を申し。唯今松の尾の明神に参詣仕り候。

道行

「嵯峨の山。御幸絶えにし芹川の。／＼。千代の古道跡ふりて。行方正しき天雲の。大井の入江霧こめて。上は嵐の山風の。声も通ひて松の尾の。神

の宮居に着きにけり。／＼。

シテ、ツレ一聲
「秋風の。声吹き添へて松の尾の。神さび渡る氣色かな。

シテサシ

「有難や和光同塵の斎垣の内には。年を迎へて槃若の真文を講じ。

二人
「又利生方便の社の前には。日を逐うて如在の靈殿を仰ぐ。神明の納受疑ひなく。摂取の願望各成就円満の靈地。今にはじめぬ神拝なれども。まこと

に貴き社内かな。

下歌 「時しも今は長月の。紅葉も四方の氣色にて。

上歌 「春見しは。花の都の雲霞。く。立つや日数も移り来て。今ぞ時なる秋の空。曇らぬ月の都路に。ゆきゝも繁き諸人の。秋ゆたかなる心かな。く。
ワキ詞 「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞 「老人とは此方の事にて候ふか。まづ御姿を見奉れば。此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。都よりの御参詣にて御座候ふか。

ワキ 「実によく見てあるものかな。都より始めて当社参詣の者なり。山の姿神館の面白さに詠め居て候。当社の御謂委しく申し候へ。

シテ 「さん候此山林は。皆神の御敷地なり。誠に御代千秋の君が住む。都は間近き神前にて。

ツレ 「むかふ梅津の秋の葉は。河水に浮ぶ綾錦。

シテ詞 「織りかく雲も小倉山。しぐるゝ頃の朝なく。

ワキ 「昨日は薄きもみぢ葉の。

シテ 「今日は濃染の色深き。

ワキ 「西紅の峰つゞき。

シテ 「さながら四方の。

二人 「錦なれども。

地 「松の尾の。山は梢の秋ならで。く。唯時雨のみ
年経るや。霜の後。雪の冬木になるまでも。時知
らぬ常盤木の。いく久し神松の。落葉ばかりは塵

の世に。交はる誓ひ頼もしや。く。

地クリ 「それ天は陽を以て徳とし。地は陰を以て用とす。
シテサシ 「然れば神は人天百王の守護神として。

地 「本地寂光の都を出で給ひ。此閻浮提に示現し。五
衰の睡りを無上正覺の月に覚まし。

シテ 「国土豊に民厚かれと。

地 「安全を守りおはします。

クセ 「和光同塵は結縁の御はじめ。八相成道は利物の終

りを見する御誓ひ。實に目前にあらたなり。仏は又常住不滅の相を顯はし。有無中道を離れて。人を濟度の方便。是れ以て同じ悲願なり。神といひ仏といひ。唯是れ水波の隔てにて。本地垂跡と顯はれ。三世了達の智恵を以て。現当二世までの道を照らし給へり。さればにや此社。いづくもといひながら。殊に所も九重の。雲居の西の山の端を。照らすや光りも夕月の。空さて嵐山の。峰

には実相の声満ちて。聞法の便のみ。大井の波の音までも。常樂我淨の。結縁をなす心なり。

シテ
「梅津桂の色々に。

地 「日も茜さす紫野。北野平野や賀茂貴船。祇園林の秋の風。稻荷の山のもみぢ葉の。青かりし恵みもさまぐに。誓ひの色はかはれども。此神は分きて世の。月常住の地をしめ。王城を守る神徳の。久しき国に跡垂れて。慈尊三会の暁を。松の尾の

神垣。かはらぬ色ぞ久しき。

ロンギ地

「實にや誓ひの秋久に。く。代々を守りの御神徳。
猶ゆくすゑぞ頼もしき。

二人 「時しも今日の御神拝。有難いとも木綿四手の。神
の夜神樂めんくに。神をすゞしめ申さん。

地 「さては時しも夜神樂の。声も普き数々に。

二人 「すはや照り添ふ夕月の。

地 「庭燎の光り。

二人 「榦葉を。

地 「うたふ乙女の袖はえて。花の裳裙も色々に。紅葉
をかざし松の尾の。神の告を都人。夜神樂を拝み
給へとよ。く。(中入)

ワキ歌

「實に今とても神の代の。く。誓ひは尽きぬしる
しとて。神と君との御恵み。まことなりけり有難
や。く。

後ジテ 「それ千秋の松が枝には。万歳の緑常盤にて。御代

を守りの御影山。君安全に民栄え。五日の風も枝

を鳴らさぬ。松の尾の神とは我事なり。

地「八乙女の。袖もかざしの玉かづら。

シテ「かけてぞ祈る玉松の。

地「光りも散るや露も白縫の。鈴も颯々の。舞の袂は

おもしろや。(神舞)

ロング地「秋の夜神楽声澄みて。く。神さびわたる深更の。

朱の光りは有難や。

シテ「庭燎の影も明らかき。榦葉うたふ妙文の。こや松
の尾の神風。ふけ行く秋ぞ惜しまるゝ。

地「實に惜しむべし惜しむべし。今宵の時も逢ひにあ
ふ。

シテ

「月の光りも照り添ふや。

地「朱の玉垣。

シテ「玉の扉。

地「さし引く袖の露かけて。光りも散るなり小忌衣。

立ち舞ふ花も白妙の。雪をめぐらし千早ぶる。神
ぞ久しき松の尾の。おのづから長き夜の。神樂ぞ
めでたかりける。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹著